

風つかいのビーン

瀬戸内町立秋徳小学校 二年 はま田 りょう

「あああ、てん校したくないな。」

けんたは小学校二年生。この春、大きな町からこのかけるまじまにかぞくでひっこしてきたのです。

「友だちできるかなあ。」

はじめてのてん校なので、いつもの元気がなかなかでませんでした。

「けんた、さんぽでもしてきたら。」

おかあさんにそう言われて、海の見える山みちをさんぽすることになりました。

山のとっぺんまでのぼると、

「うわー、きれいだあ。」

たいようの光をはんしゃして、海はキラキラとかがやいています。

「山のとっぺんは、気持ちいいな。」

すずしい風がふいてきたそのときです。

「キュルルル。」

今までに聞いたことのないとりのなきごえが聞こえてきたのです。けんたは、いえにかえってからお父さんにききました。

「けんた、それはきつと赤しようびんだよ。」

けんたは、さつそくお父さんと図かんで調べてみました。そのとりは、ほのおのようにまつかでした。

「ほんものを見てみたいな。もう一どあそこに行けば、見れるかも。」

よく日、けんたはあの山のとっぺんに行きました。すると、けんたを見ていたかのように、

「キュルルル。」

とこえがしました。けんたは思わずまねしました。

「キヨロロロ。」

どこからか、風がふいてきました。

「キュルルル。」

けんたもまた、

「キヨロロロ。」

ピューッと風がふいたそのとき、そこに小さい赤しようびんがあらわれ、こう言いました。

「きみつて赤しようびんなの。」

「あつ、赤しようびんがしゃべってる。」

けんたがびつくりしていると、

「なんかへんな赤しようびんだね。体はでかいし、赤くない。」

「ぼくは人げんだよ。」

「へえ、ぼくはじめて人げんとしゃべったよ。ぼくの名前はビーン。これでもりっぱな風つかいさ。」

「風つかいってなに。」

「風つかいをしらないの？ぼくら赤しようびんは、風をおこしたり、風をあやつつたりできる風つかいなさ。」

「どうやって風をおこすの？」

「見ててよ。」

ビーンは、はねをむねの前で合わせると、パサパサと三かいうごかしました。すると、ビーンの体はもつと赤くなつてかがやきました。

「キュルルル。」

ビーンがないたそのしゅんかん、とつてもすずしい風がけんたのよこをふきぬけていきました。

「なんて気もちいい風なんだ。エアコンの風なんかより、ずっといい。」

けんたはこころからそう思いました。

「気に入ってくれた？ぼくたち友だちになれそうだな。」

「ぼくけんた。あしたもここにくるよ。」

けんたはニコニコしながら手をふりました。

「けんた、ニコニコして、お友だちでもできたの？」

いえにかえると、おかあさんにそういわれました。

「うん、とつてもすてきな友だちができたんだ。」

夕がたのすずしい風がふいてきました。

「あ、これはきつとビーンがおこした風だ。ねえおか

あさん、ここではエアコン買わないようにしようよ。」

「あんたがほしいって言ったんじゃない。どうしたの。」

「このしまには、風つかいがいるんだ。ぼくの友だちさ。」

おかあさんは、きよんととしてけんたを見ました。

つぎの日の朝、けんたはまたあの山に行つてみまし

た。けんたが、

「キョロロロ。」

と言うと、風がふいてビーンがあらわれました。

「ビーンおはよう。ねえ聞いて。ぼくたちエアコン買わないことにしたんだよ。すずしいビーンの風が楽しみなんだ。」

「うれしいなあ。ぼくたちの風をまっている人がいると思うとやる気が出るよ。でもね、きのうとうちゃんに、人げんの子と会つてはいけないつて言われたんだ。」

「えー、せつかく友だちになれたのに。」

「会えなくても友だちは友だちさ。ぼくは風つかいだから、きみがうれしいときも、楽しいときも、かなしいときも、なきたいときも、いつだって風をおくるよ。だからずっと友だちさ。」

「じゃあ、ぼくはいつも風がふくときは、キョロロローって赤しようびんごでこたえるよ。」

「はつおんれんしゅうしとけよ。」

けんたとビーンはいつしよにわりました。

「じゃあぼく、しごこの時間だからそろそろ行くね。

キュルルル。」

すずしい風が木のはをゆらしました。けんたが空を
見ていると、

「ふわり。」

まっかなはねが—まいおちてきました。けんたはそ
のはねをひろうと、だいじにポケットに入れてにつこ
りわりました。